

教員質問紙調査の再設計について

本市が直面している課題



先生・指導に関する分析可能なデータが不足

- どのような取り組みを先生が実際に行っているかというデータが少ない。そのため、県学調の伸びの要因分析をしたくても、分析に堪えるデータが少ない。
- 市教委はいろいろな施策を打ち出しているが、最終的には学校や各教員の自走に委ねている部分も多く、見取り切ることができていない。
- 「教員質問紙調査」を行っているが、分析が難しい設問設計になっていると思われる。



インタビューの限界

- 県学調で学力を伸ばしている先生がいても、「何がその要因か」をデータから分析する手段がなく、直接インタビューするしか選択肢がない。
- インタビューで聞きとった内容も、当該教員の担当しているクラスでのみ有効な方法かもしれないし、聞き取り切れないその人固有のスキルが影響を与えており、同じ方法で取り組んでも効果が出ない可能性もある。

⇒ これらの課題を踏まえ、教員質問紙調査の再設計を検討する

教員質問紙調査の概要

教員質問紙調査

教員質問紙調査は毎年3月に戸田市の全教員に対してアンケートを実施している悉皆調査。
設問は、以下の3区分に大別される。

- 教員の基本情報（個人属性・校内役職・担任・授業クラス等）
 - 誰を教えたかを紐づけられるよう、担任クラス・授業クラスを聴取している
 - 経験年数、在校年数、校内役職、担任クラス、授業したクラス・教科 etc.
- アクティブラーニング指導用ルーブリックに関する設問
- その他の設問

②アクティブラーニング指導用ルーブリックに関する設 問

目指すべき目標・評価規準の設定等

- 指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）を設定できた
- 本時の目標に正対する評価規準・評価方法が設定できた
- 児童生徒の学習意欲を高められる導入場面を設定できた（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

主に主体的な学びの視点

- 本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができた
- 自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒たちへの）支援方法を準備し、支援することができた
- 自分の考えを表現することができるように、教具の工夫、適切な時間や場の設定等の準備ができた
- 目標の実現につながるような学習活動を設定できた

主に対話的な学びの視点

- 児童生徒の考えを広げ深められる学習形態（個人、ペア、グループ、全体）を設定できた
- 児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（タブレットPC・具体物等）を工夫して用いることができた

- 目標の実現につながるように児童生徒の考えを可視化（板書・口頭・ICT等を使って示すこと）ができた

選択肢は5件法

- ほぼ毎時間の授業（または単元）について当てはまる（実施率100～90%）
- 多くの授業（または単元）において当てはまる（実施率89～70%）
- どちらともいえない
- 多くの授業（または単元）において当てはまらない（実施率30～10%）
- ほぼ毎時間の授業（または単元）において当てはまらない（実施率10%未満）

②アクティブラーニング指導用ルーブリックに関する設問

深い学びの視点

- 児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」を明確に示すことができた
- 児童生徒が「見方・考え方」を働かせるための学習活動を設定することができた
- 児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化（板書・口頭・ICT等を使って示すこと）ができた

学びの評価・振り返り

- 評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ&レスポンスする）ことができた
- 目標に準拠した指導と評価となるよう、学習の状況を適切に評価し、児童生徒に伝えることができた
- 児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面を設定できた

選択肢は5件法

- ほぼ毎時間の授業（または単元）について当てはまる（実施率100～90%）
- 多くの授業（または単元）において当てはまる（実施率89～70%）
- どちらともいえない
- 多くの授業（または単元）において当てはまらない（実施率30～10%）
- ほぼ毎時間の授業（または単元）において当てはまらない（実施率10%未満）

③その他の設問

- 教師の説明や指示に終始せず、児童生徒が主体となる授業づくりや活動に取り組んだ
- どの子も落ち着いて集中して学ぶことができる環境づくりというユニバーサルデザインの視点を、教室環境づくりや授業づくりなどにおいて重視した
- 教師と児童生徒、及び児童生徒間の良好な人間関係作りに努め、多様性と包摂性のある支持的風土づくりを行った
- 児童生徒一人一人の伸びや変容を気にかける、積極的に認め褒めるようにした

選択肢（5件法）あてはまる、どちらかといえばあてはまる、どちらともいえない、どちらかといえばあてはまらない、当てはまらない

教員質問紙調査の経緯

2016～2018年度
(H28～H30)

県教委依頼により実施

埼玉県学力・学習状況調査と併せて分析するため実施。県教委のデータ活用事業の一環で、中室研究室が分析委託先。教員の非認知能力やリスク回避性、授業内時間配分も設問に含まれていた。

2019年度～
(R1～)

市の独自調査として実施

年1回・年度末に戸田市内全教職員を対象に実施。H30以降、設問は現在の形式に近い形で整理された。

2023年度～
(R4～)

設問数削減

回答負荷軽減のため設問数を削減。

報告書等での研究成果

これまで、以下のような報告書・学術論文が発表されている。

中室他（2018）調査報告書-埼玉県学力・学習状況調査のデータを活用した効果的な指導方法に関する分析研究-

- 平成29年度「埼玉県学力・学習状況調査のデータ活用事業」の報告書
- 教員質問紙調査について記述統計を紹介。指導法について、教員の回答と児童生徒の回答にずれがあることを紹介

伊藤・田端（2022）教員付加価値から見た教員の役割について —日本の小学生を例にして『日本労働研究雑誌』

- 教員質問紙調査のうち、使用されているのは、担当クラス、年齢、教員歴、性別、出身大学の偏差値
- 指導方法に関する設問は使用されていない。
- 学力や学習方略に対して個々の教員の違いが与える影響力（教員付加価値）は子ども全体の変動のうち2%から5%を説明する一方で、非認知能力や学級での子ども・教員間の関係性に対しては子ども全体の変動のうち13%から16%を説明する。
- しかし、高い教員付加価値を持つ教員の観察可能な特徴を見つけることはできなかった。すなわち、年齢や性別といった教員の観察可能な特徴と推定された教員付加価値との間に統計的に有意な相関関係はなかった。

課題の整理

課題整理（専門家へのヒアリング）

慶応義塾大学中室研究室に当時在籍し、本調査を使用していた伊藤寛武氏にヒアリングを行い、課題整理を行った。

データの正確性・完全性について

- 調査の核となる部分は、付加価値モデルを推定するための児童生徒と教員の突合用データの収集
- 一方で、回答の正確性や回答率の問題から、突合が容易ではなく欠損が非常に多いデータとなっていた。
 - 他にデータソースがあるのであれば、教員からの聞き取りよりも、正確なデータを作成できるのではないか。

アンケート部分について

- 回答の分散が小さく、統計的な分析を行うことが難しいデータであった。
- TALIS（OECD国際教員指導環境調査）等と比較可能な形で設計された調査ではなかったため、比較対象がなく活用法を見出すのが難しかった。

サンプルサイズについて

- 埼玉県学調と紐づけた分析では、分析対象となるのは小4～小6を担当している教員と中1～中3の国・数・英の担当教員のみとなり、統計的分析に堪えるサンプルサイズの確保が難しい。
 - 異動や無回答などでサンプルが削れていく。

※伊藤氏より「当時の記憶をもとにした発言であるため不正確な可能性がある」とこのコメントがあった。

その他の課題（目的と手段の適切性）

- 目的（指導の改善・AL指導用ルーブリックの改善）について
 - 目的：AL指導用ルーブリックの改善のためのデータ取りとアンケート回答を通じた自己評価（リフレクション）
 - 「学級経営リフレクション」との重複感が強い
 - 社会的望ましきバイアス（自己報告データのため、指導方法の実態把握データとしては信頼性に限界あり）
 - 自己評価型ではない、価値中立的な指導に関するデータの不足。
- 目的（教師と児童生徒の紐づけ）について
 - 目的：教師と児童生徒の紐づけのデータ取り
 - 教員の基本情報や担任クラス、授業クラスのデータは、教員への質問紙ではなく別途学校から提出されている資料やデータから把握したほうが、教員の回答負担軽減とデータの正確性・完全性に資するのではないか。

再設計に向けて

教員質問紙調査を通じて知りたいこと

- 戸田市の先生・指導の現状・実態把握
 - 戸田市の先生はどのように授業準備を行っているのか。何を参照しているのか。
 - どういう授業・指導を行っているのか（手法、教具、家庭学習）
 - 児童生徒や教職についてどのような価値観を持っているのか
 - 「個別最適」や「主体的」、「深い学び」というような、指導要領におけるキーワードについてどのように解釈しているのか。
 - 市全体で導入しているICT教育環境をどのように使用しているのか。

大まかな方向性（目的・比較軸・調査設計方針）

収集の目的・分析軸

- 戸田市の先生ってどんな考えで・どんな取組を行っている？（基礎情報としての把握）
- 戸田市の先生の中で違い（分散）が大きいのは何か。その違いは別の指標と相関しているか（市内比較）
- 全国の先生と比較し、戸田市の先生はどういう特徴を持っているのか。（国内比較）

調査設計方針

- 必要な項目について整理し、具体的な設問を検討する。
 - 基本情報として把握したい項目と仮説検証のために把握したい項目を分別して整理
 - 自己評価型（～ができた）の設問から価値中立的な設問へ転換
 - 分散を想定しつつ設問設計を行う。分散が小さくなりそうなものは単純集計値として把握したいかどうかで取捨
 - T A L I S の設問を参照しながら設計し、できる限り共通化することにより、比較可能性を持たせる
 - 教員の基本情報や担任・授業クラスの情報他他のデータソースから調達し、記入済み質問紙で確認とい

参考) TALIS2024の設問例①

この学校で以下のことは、平均してどのくらいの頻度で行われていますか。

- 学級内でチーム・ティーチングを行う
- 他の教員の授業を見学し、感想を述べる
- 学級や学年をまたいだ合同学習を行う(例: プロジェクト)
- 同僚と教材をやりとりする
- 特定の児童/生徒の学習の向上について議論する
- 他の教員と共同して、児童/生徒の学習の進捗状況を評価する基準を定める
- 専門性を高めるための勉強会に参加する
- 児童/生徒の学習活動全般を充実させるために保護者と協力する

選択肢：行っていない, 年に1回以下, 年に2～4回, 年に5～10回, 月に1～3回, 週に1回以上

参考) TALIS2024の設問例②

この学校における変化について、それが学校主導か外部主導かにかかわらず、以下のことはどの程度当てはまりますか。

- この学校では、変化のための取組が多すぎる
- この学校の変化にはうんざりする
- この学校では、あまりにも多くのことを変えるよう求められる
- 絶えず周りの何かを変えることを求められているように感じる
- この学校の何かを変える前に、まず安定した期間が欲しい
- 必要な資源がないのに変化のための取組をするよう求められる

選択肢（4件法）：全く当てはまらない, 当てはまらない, 当てはまる, 非常によく当てはまる

参考) TALIS2024の設問例③

あなたにとって、教員として以下のことはどのくらい重要ですか。

- 教職は自分の能力に合っている
- 教職は安定した職業である
- 勤務時間が家庭の事情に合っている
- 教職は勤務に柔軟性がある(旅行、パートタイム、家庭の用事)
- 教えることで次の世代に影響を与えることができる
- 教えることで社会の不公平の改善に取り組むことができる
- 教えることはやりがいのある社会貢献になる
- 子供や若者と関わるのが好きである
- 教職は自主性を発揮できる

選択肢(4件法) : 全く重要ではない, あまり重要ではない, ある程度重要, 非常に重要

ご意見いただきたいこと

- 教員質問紙調査の在り方について
- 必須データ項目はあるか
 - 取得しておかないとデータの利用可能性が著しく下がるデータ項目は何か
 - 他のデータソースから情報を引っ張ってくるときの目的外利用について
 - その時々に関心でデータ項目を変更してよいのか（パネルデータとしての価値）
- 社会的望ましきバイアスへの対応
 - バイアスを回避・軽減できるような質問紙設計は可能か
- 調査負荷の軽減
 - 教員の負担を下げるための工夫（設問数、回答方式、実施時期など）
- 研究利用を見据えた場合の倫理審査やデータ管理のあり方
 - 研究者への貸し出し等が発生するケース（2次利用）を想定した倫理審査等について
- その他、調査設計・実施に際して気にすべきことは何か